

論文の内容の要旨

論文題目 私密性と公共性の自己論

— 一人称代名詞の諸研究を手がかりに

氏 名 森永 豊

本論文は、自己に私秘的な側面と公共的な側面という相反する両面が等しく備わっていることを示した上で、適切な問いを立てて自己を論じるための枠組みとして、中世の個体化の図式とタイプ-トークンの区別を組み合わせ、自己タイプの例化の図式に自己の両面性を位置づけるべきことを論じる。そして自己タイプの例化を解明する課題に取り組んで、一人称代名詞の意味論、及び心理学研究を手がかりにしながら、他者との関係を不可分に含む仕方で自己の私秘的な側面を理解することが可能であることを論じる。

本論部分は第1章から第4章で構成される。

第1章では他我問題に関する二人の哲学者の議論を対比させながら、両者が共通した誤りに陥っていることを論じる。第一は永井のデカルト主義であり、第二は野矢の反デカルト主義である。私は両者を批判的に検討するものの、それぞれの立場から受け取りたい洞察があり、それらの洞察を合わせると私が擁護したいひとつのテーゼになる。すなわち、われわれには互いに分かり合える部分もあれば、決してわかり合うことのできない部分もある。言い換えると、おのおのが出会う「自己」には、他人と共有される公共的な部分と他人からは絶対にアクセスできない私秘的な部分がある。これは、永井と野矢がこれら二つの部分の一方を切り捨てていると批判するものではない。永井も野矢も自己と他者の関係をわれわれの実感に沿う仕方で理解することを目指している。問題は二人の議論が狙いを達成できていないということである。そ

の理由は、それぞれが自己の私秘性と公共性のどちらかを立論の出発点に選んでいるからである。しかし、私秘性と公共性はどちらも自己の議論の出発点である。そして、立論の出発点に一方を選択させるのは他我問題の枠組みにあると主張する。

第2章では自己論の枠組みを新しく設定して、新しく問題を立て、その答えの候補に該当するクリプキの立場を論じる。最初に私は、新しく自己論の枠組みを構築する課題に取り組む。そこで私は自己の二重的性格に照らして、「普遍としての自己」と「個体としての自己」の区別を論じ、中世の個体化の図式とタイプ/トークンの区別を組み合わせて、自己タイプの例化の図式を得る。自己タイプの例化において問題となるのは、自己トークン同士を互いに区別する「差異」の内容である。差異の性格づけ次第で、これは自己の二重的性格のそれぞれの側面のくさびになりもし、あるいは両者の不調和を解消できないものになってしまう。そこで次に、私は両者のくさびとなる差異を何に求めるべきかを考察する。その候補をクリプキが提供していることを、Kripke(2011)のテキスト解釈を通じて明らかにする。とはいえ、Kripke(2011)そのものは一人称代名詞の意味論についての考察なので、Kripke(2011)から候補となる見解を取り出すのは、やや複雑な解釈の筋道を辿ることになる。Kripke(2011)のポイントは次である。すなわち、カプランの指標詞の理論は一人称代名詞の使用規則を正しく説明する。ただし、表現の使用についての意味論的記述は、使用者が表現をどう把握しているかを反映したものでなければならない。たとえば一人称代名詞の使用についての意味論的記述であれば、使用者の一人称視点に言及せざるを得ない。というのも、一人称代名詞は発話者が本人のことを一人称的に語る場合にのみ使われるものだからだ。そして使用者の一人称視点を表す表現は実際のところ指標詞そのものである。よって、指標詞の使用規則を指標詞を用いて説明することは避けられないことになる。一人称代名詞の使用者が自分自身に直接的に与えられることを端的に示す事例は「我在り」である。デカルトが論じたように「我在り」は常に真である。すなわち、この事実はこの文を発話した本人にとって疑いようがない。クリプキは、自己とはコギトと身体の不可分の合一であるというデカルトの「第六省察」の命題を支持し、誰もが私だけでも各々は互いに一人称的な観点から異なるという「常識的な見解」をそこに読み取る。さらにクリプキは一人称代名詞の「意義 Sinn」について論じるフレーゲの議論を解釈し、ここにも上と同様の見解を読み取る。この解釈に共通した目的は、デカルトとフレーゲがそれぞれデカルト主義に陥っているという誤った解釈から救い出すことである。二人の哲学者の解釈を通じてクリプキは、フレーゲがデカルトのコギトにコミットしていたという斬新な読み方を提示する。クリプキがこうした解釈を試みた動機が、「差異」の候補に通じる。「自分自身」「自己」といった表現はクリプキによれば、上に再解釈された各人のコギトと身体の合一を指す表現である。「差異」はコギトであるという提案を Kripke(2011) から読み取ることが可能なのである。

第3章では差異についてコギトの代案を検討する。自分自身を固有なものにしている差異をコギトに求めてしまうと、自分自身の識別と他の自己トークンの識別の間に隔たりが生じてしまうことが代案が必要な理由である。すなわち、差異がコギトでは、「誰もがそれぞれ私である」という自己の側面がうまく捉えられなくなる懸念があるのだ。そこで目指すのは、自分自身の識別され方と他者の識別され方の間に本質的な違いを認めないまま、自分自身との一人称的な関係も捉えることである。私は差異のうちに他者性を読み込む議論を展開させることで、この点を達成することを目指す。まず、自己が本質的に社会的であることを論じる過去の見解を紹介し、アイデアの取捨選択を行う。私が利用するのはミードの記号相互作用説である。この立場は、他者との社会的なやり取りの中でしか自己は見出されないと考える。ミードの場合、自己であることとは記号的な相互作用の相手としての他者を抽象化して内面化することに求められる。私はお互いを「鏡」としながら他者との関係のうちに自己が成立するという記号相互作用説のアイデアに自己の社会性をすくい取る道があると考えている。ただし、ミードの考え方では自己の固有性が十分にすくい取れない。私は他者との関係が自己であることの全てではないことを論じるため、幼児の一人称代名詞の習

得についての発達言語学の研究を検討し、ひとが自己になるとはどういう過程なのかを考察する。これを踏まえて私は、幼児の発達の初期においてまだ他人の視点から自分を理解することもできないころに、自己の萌芽的なあり方として自分自身を対象化している可能性を論じる。そして、幼児が社会的な関係を他者と取り結べるようになった後もこのような初歩的な個性の自覚が自己性の基礎として残っていると論じる。以上の研究を通して、私はこのプリミティブな個性のうちに差異を特定する。

第4章では一人称代名詞のさまざまな用例を考察してカプランの指標詞の理論を検討する。その目的は、コギトに関連するクリプキの見解を批判することで在り、とりわけコギトと一人称代名詞の使用を結ぶ論点を検討することである。クリプキにおいては「我在り」の恒真性を介してコギトと一人称代名詞の意味論が結ばれている。そして「我在り」の恒真性に指標詞の理論はエレガントな説明を与えることが、その強い支えとなっている。よって、まずは指標詞の理論を検討する。だが結果から言うと、指標詞の理論は強力で、一人称代名詞の一見するとアノマリーに見えるような用例も簡単な手立てで説明できてしまう。議論で扱われる一人称代名詞の用例は、一人称代名詞の発話が発話の脈絡にいる発話者を指示対象としない場合と、一人称代名詞の発話において発話者の擬人化が伴う場合である。前者のタイプは、「私」と言って日本国民を表すことのできる事例、同じく発話者ではなく発話者の書いた本を表すことのできる用例などである。こうした用例が指標詞の理論でも扱えると考えられるのは、意味論を与える発話内容に対して会話の推意を導く語用論的推論に訴えることで説明が可能だからだ。ナンバークはこれに反対して、私が「発話内容決定プロセス」と呼ぶ仕組みによって一人称代名詞の広汎な使用を説明できることを論じる。私は事例の研究を通じて発話内容決定プロセスが有効な代案ではないことを示し、なおかつ会話の推意に訴える方法に問題があるとするナンバークの反論に不備があることを示す。次に一人称代名詞が擬人化を伴う仕方で用いられる場合を考察して、ウェイルズの立場を検討する。ウェイルズは、たとえば商品に‘Try me free!’というタグがつけられていて、客がこれを見て書かれた通りの行動をとった場合、商品を真正の話者として認識したと論じる。私は事例の研究を通じてこの主張が保持し難い点を指摘し、この場合の用例についても指標詞の意味論と会話の推意を導く語用論的推論に訴えることで説明が可能だと論じる。

終章では第4章までの議論をまとめ、課題と展望を述べて本論文の議論を閉じる。